
「背筋凍らせ屋」

三毛猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「背筋凍らせ屋」

【Nコード】

N0936BA

【作者名】

三毛猫

【あらすじ】

涼しくなる話、知りたいか？ 友人に問われてその方法を実行したわたしが見たものは。

【夏まつさかり】 【橋】 【夏服の人】のお題で書かれた掌編です。

以前t e x p oにて公開していました。現在p i x i vにても「三毛猫の三題話」の一遍として公開中です。

一年中半袖シャツで過ごしているため、心の中でこっさり”夏服の人”と呼んでいる友人が、どういうわけか夏まつさかりのこの時期に長袖シャツを着て来たので、「暑くないの？」と尋ねたら「寒いくらいだ」と小さく身体を震わせた。熱でもあるのかと、額に手を当てようとしたら、彼は「涼しくなる話、知りたいか？」と意味ありげな笑みを浮かべた。

夏服の人曰く、「どこにも続かない橋のもとに供物を捧げよ、さすれば冷氣訪れん」とのこと。いったい何の話なんだかよくわからない。つーかなんで古文書みたいなセリフなんだ。

「どこにも続かない橋って、作りかけで放置されてる近くの橋のこと？」と首を傾げるわたしに、友人はニヤニヤ笑って「試せばわかるさ」と取り合ってくれなかった。

放課後、お供え物の飴を持って橋のもとに向かうと、意外に広まっている噂話なのか小さな石碑のようなものには既に様々なお供え物が供えてあった。ここかな、と思いながらも飴を供えた瞬間、なぜか背筋がぞつとした。周りを見回すが何も見えない。……結局、それきり何も起きなかった。夏服の人の言う、「冷氣」とはいったい何のことだったのだろうか？

拍子抜けしてその場を立ち去ろうとした時、視界の端に一瞬、白いものが映った気がした。なぜだか、背筋のゾクゾクがとまらない。さっきから視界の端に映る白いものはなんだろう。背後が妙に気になる。振り返ると誰も居ないのだけれど、確かに、何か居るような気がする。そうだ、鏡を使ったらどうだろう。鞆からそつと手鏡を取り出して背後を映すと、全身真っ白な着物で、片目が髪に隠れている儂げな様子の少女がこちらを見つめて冷たく微笑んでいた。

「さ、流石にホンモノの幽霊とか遠慮したいんですけど……？」と引きつった笑みでつぶやいた瞬間、「ご利用ありがとうございます

た……またのご利用を……お待ちしております」と、か細い声が背後から聞こえて、小さく微笑んだ少女が、音もなく消えた。

(後書き)

タイトルがオチになります。よくわからなかった方のために説明しますと、お供え物もらって背筋を凍らせて涼しくしてくれる、背筋凍らせ屋さんの幽霊のお話です。800字でなくて1500字くらいでもう少しいろいろ細かい設定とか、だんだん白い人影が近づいてくる、とかやった方がよかったネタかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0936ba/>

「背筋凍らせ屋」

2012年1月2日02時51分発行